

## 2026年3月15日 説教「放蕩息子と父親」

### ルカの福音書 15章 11～24節

15章は、イエス・キリストが取税人、罪人と共に食事をしていることに、パリサイ人と律法学者が批判的したことに端を発し、イエスが「迷子の羊」のたとえ話、「失われた銀貨」のたとえ話をされ、それを学んできました。

#### 1. 何もかも使い果たし (11～16節)

- ①身代を二人に (11～12) 「またこう話された。『ある人に息子がふたりあった。弟が父に、『お父さん。私に財産の分け前を下さい』と言った。それで父は、身代をふたりに分けてやった。」

ここにもう一つのたとえ話がなされます。動物や物に続き、失われた人についての話です。二人の息子がいる父親に起きた出来事です。弟息子が、財産分割を求めたのです。父親はしばし考えたことでしょうか、身代を二人に分けてあげることにしました。

- ②放蕩して (13～14) 「それから、幾日もたたぬうちに、弟は、何もかもまとめて遠い国に旅立った。そして、そこで放蕩して湯水のように財産を使ってしまった。何もかも使い果たしたあとで、その国に大きんが起り、彼は食べるにも困り始めた。」

財産の分け前をもらうと、次男はすぐに行動し始めました。そして、遠い所にある賑やかな町に向かったのです。彼はそこでたくさんあるお金で遊びました。来る日も来る日も、美食し、欲望の赴くままに過ごしました。人にも奢ったことでしょうか。ところが、大金もいつの間になくなっていき、ついには使い果たしました。悪いことに、その国に飢饉までやって来たのです。たちまち彼は食べることもままならなくなりました。

- ③豚の世話を (15～16) 「それで、その国のある人のもとに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって、豚の世話をさせた。彼は豚の食べべるいなご豆で腹を満たしたいほどであったが、だれひとり彼に与えようとはしなかった。」

どうしようもなく彼はある人の所に身を寄せ、働かせてもらったのです。仕事は豚の世話でした。食べることもままならず、空腹でした。彼は豚の餌であるいなご豆を食べようとすら思いました。なのに、周りの者たちも冷淡で誰も彼に食べ物を与えてくれる人はいませんでした。

#### 2. 息子を見つけた父親 (17～20節)

- ①我にかえって (17) 「しかし、我に返ったとき彼は、こう言った。『父のところには、パンのあり余っている雇い人が大ぜいいるではないか。それなのに、私はここで、飢え死にしそうだ。』」

その時、彼は「我に返った」のです。そうだ、お父さんの所には大勢が働いている。食事は豊かに皆が与えられている。それに引き換え、自分はどうだ。お腹を空かせ、飢え死にしそうではないか。

- ②悔い改めの言葉 (18～19) 「立って、父のところに行って、こう言おう。『お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯し

ました。』立って、父のところに行って、こう言おう。『お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私はあなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。』

彼は父に向かっていうべきことを考えました。悔い改めの言葉でした。まずは父なる神をないがしろにしたこと、次にはお父さんに対する尊敬を損ない不埒であったことを伝えることにしました。その上で、自分はもはや子と呼ばれる資格はないが、雇い人にしてほしいと頼むことでした。

③父のもとに向かい (20)「**こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとに行った。ところが、まだ家まで遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄って彼を抱き、口づけした。**」

決意すると彼は立って、実家へと向かいました。彼が家に近づくと、まだ遠くであったにもかかわらず、ずっと見守っていたのか、父親が彼の存在に気が付きました。父親はよたよたと歩く息子の姿をかわいそう思って駆け寄り、彼を抱きしめ、口づけをしたのでした。

### 3. 息子の悔い改めと祝宴 (21～24 節)

①天と父親への罪 (21)「**息子は言った。『お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。』**」

息子はあらかじめ準備しておいた言葉の通りに言いました。天と父親への罪、自分は子と呼ばれる資格がないことに加え、雇い人の一人にしてほしいとまで言ったことでしょう。

②一番良い着物を (22)「**ところが、父親は、しもべたちに言った。『急いで一番良い着物を持って来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせなさい。』**」

父親はそんな息子の言葉の中に、深く反省していることを即座に感じたことでしょう。早速、しもべたちに命じたのです。「急いで一番良い着物を着せるように」とありますが、息子の着物はぼろぼろで汚れていたと思います。「手に指輪を」とあるのは、父の子どもである証でもありました。それに、長く歩いてきたのですから、履物はかろうじて足を覆っている状態だったでしょう。その代わりに上等の靴が履かせられたのです。

③祝宴を始め (23～24)「**『そして肥えた子牛を引いて来てほふりなさい。食べて祝おうではないか。この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから』そして彼らは祝宴を始めた。』**」

父親の息子への心配りは続きます。祝宴を計画したのです。肥えた子牛をほふって食べるというのです。大ごちそうで皆で息子がかえってきたことを祝うというのです。迷子の羊が戻って来た時、失われた銀貨が見つかった時と似ています。祝宴の理由を父親は、この息子は死んだと思っていたのに、生きてここにいるからだと説明しています。

### 《展開と結論》

芥川龍之介がこの放蕩息子の話を、最高の短編であると述べています。短編の名手をしてそのように言わしめたこの話は、その表現は簡潔ですが、読み手にその行間をいろいろと想像させます。その内容は、「迷子の羊」の話、「失われた銀貨」の話とも関係しています。また、放蕩息子の話の今日読んだ部分は話の前半であり、後半部分も大切なメッセージがあることは覚えておきたいと思います。

今朝の聖書箇所には、父親とその息子の行動から、それぞれの重要なメッセージが示されています。まずは息子の側面から見ていきましょう。財産分与が実現して、彼は多額のお金を得ました。早速、遠くの町に出て湯水のようにお金を使ったのです。来る日も来る日も、お金を自分の欲望を満たすために使いました。楽しくはあったでしょうが、一面の虚しさもあつたと思います。しかし、お金は底をついてしまい、豚の世話をするようになりました。十分食べられずに失望していました。そんな時に彼は「我に返った」のです。すなわち、自分がかつて、父と共にいて、非常に恵まれていたのだということに気づきました。また、自分がいかに傲慢で父なる神を侮り、父親に対しては「父と母を敬え」という戒めを忘れて、自分のプライドと欲望のままに生きていたことがわかったのです。その時に彼は、父の所に帰って、父なる神に悔い改めをし、父親に対しても謝罪をする決意をしたのです。ここにこの息子が導かれた重要な点があります。つまり、彼がどん底まで落ちた末でしたが、神の前に出たということです。これは恵みでありました。

万座温泉ホテルのオーナーであった黒岩堅一さんは既に天に召されましたが、かつてお金があつたので、放蕩三昧していました。そんな時に、彼は御言葉を示され、クリスチャンになりました。しかし、自分の欲望は自分の力ではどうにも抜け出せなかったと述べています。後になって、自分こそがキリストを十字架につけてしまったことがわかり、悔い改めに導かれたということです。また、それらは神の恵みであつたとも語っています。

悔い改めましょう。でも、悔い改める心も神の恵みで備えられるのです。

もう一つ学びたいことは、父親が息子の姿を見た時に、自ら駆け寄って抱いたという点です。このたとえ話を人間的にとらえて、なんと甘い父親だろうかなどと読んではいけません。ここから、私たちは「迷子の羊」の話において、羊飼いが一匹の羊を見つけるために、山や谷を越えて歩いたという愛情の視点から見たいのです。つまり、このドラ息子が、父の所に戻ってきた時に、迎え入れている点です。父なる神は罪人である者が悔い改めの心をもって神に立ち返る時に、神の側から寄り添って赦してくださる事を知りたいのです。「迷子の羊」と「失われた銀貨」の話の場合、羊飼いと女が一方的に捜し始めていますが、放蕩息子の話では、立ち返った息子を、無条件で迎え入れている父の愛が示されています。ずっと待っていてくださっている神のご忍耐がどれほどでありましょう。そして、帰ってくる姿を見れば、駆け出してくださる恵みの主に心を向けていきましょう。